

9/7 (金)
▶ 11/18 (日)

老

い

る

と

は

口

マ

ン

チ

ク

な

こ

と

な

ッ

の

か

——永瀬清子の老人力——

永瀬清子は、明治・大正・昭和・平成の4つの時代を生き、現役の詩人を貫いて89歳の生涯を閉じました。「人生100年時代」を迎えようとする今、詩人・永瀬清子の人と作品には、この「超長寿社会」を生きる知恵やヒントがあるのではないのでしょうか。老いを見つめて書き続けた永瀬清子の作品とその日々を紹介します。

企画展関連行事 岡山県生涯学習大学連携講座

講演「永瀬清子の老い ——日々新しく生きる——」

講師 ^{あやめ ひろはる}綾目 広治 先生 (ノートルダム清心女子大学教授)

日時 平成30年9月15日(土) 午後1時30分~3時

場所 赤磐市くまやまふれあいセンター第1会議室

参加費 無料 (要事前電話申込)

定員 20人 (先着順)

申込開始日 平成30年8月1日(水) ※申し込みは下記まで

※赤磐市立中央図書館1階の歴史コーナーで、本展示の資料等の一部を複製し展示しています。永瀬清子展示室にお越しになれない方は、そちらでご覧いただけます。

時間 午前9時~午後5時
休館日 月曜日 入館料 無料
場所 永瀬清子展示室
(赤磐市くまやまふれあいセンター2階
・岡山県赤磐市松木 621-1)
URL www.city.akaiwa.lg.jp/



◇ 山陽自動車道
山陽・和気ICから車で15分
◇ JR熊山駅から徒歩20分

私の健康のための人々のさまざまな忠告は、常に私自身の発見と事実とに反していることが多い。たとえば「安静に」「脂肪をとるな」「塩をとるな」「働くな」。

私自身の生命はつねに私に教えてくれる。「悩め」「力をつくせ」「戦え」「一歩出ろ」。

改まらぬ心や性質を死ぬまで日も足らず改めようとする、その人こそいつまでも若い人なのではなからうか。

自分を老人と思った時から肉体と精神の下り坂に向かうのではないでしょうか。

私「今まで平凡すぎるくらい平凡な暮らしを私はして来たと思っていたのに、今になってみるとどの一隅をとってみても胸せまる事の連続だったのです。それが私に見えて、来たという事の意味だと思ふの」

自分にやさしくする事を自分にゆるす、それが老だ。

自然で無理のない労働、心の自由、熟睡、それらが老人病には必要なのです。

なすべき仕事があり、人のためのために一心に尽すことのできる状態が一番幸福なわけです。

なるべく単純な、なるべく率直な言葉で書きたいという気持ちの方がつよくなってくるんですよ。

すこしでも暇をつくれたら自分の仕事を全うしたい。いまは忙しすぎて死なれない。今死んだら何の仕度もできていない。毎日そのことで悩んでいる。



詩人・永瀬清子 1906(明治39)年～1995(平成7)年

企画展関連行事 講演「永瀬清子の老い——日々新しく生きる——」

講師 綾目 広治 先生

〈講師紹介〉

1953年広島市生まれ。京都大学経済学部卒業。広島大学大学院文学研究科博士後期課程中退。現在、ノートルダム清心女子大学教授。「千年紀文学の会」会員。

著書に『脱＝文学研究 ポストモダニズム批評に抗して』(日本図書センター、1999年)、『倫理的で政治的な批評へ日本近代文学の批判的研究』(皓星社、2004年)、『批判と抵抗 日本文学と国家・資本主義・戦争』(御茶の水書房、2006年)、『理論と逸脱 文学研究と政治経済・笑い・世界』(御茶の水書房、2008年)、『小川洋子 見えない世界を見つめて』(勉誠出版、2009年)、『反骨と変革 日本近代文学と女性・老い・格差』(御茶の水書房、2012年)、『松本清張 戦後社会・世界・天皇制』(御茶の水書房、2014年)、『教師像—文学に見る』(新読書社、2015年)、『柔軟と屹立 日本近代文学と弱者・母性・労働』(御茶の水書房、2016年)。

編著に『東南アジアの戦線 モダン都市コレクション97』(ゆまに書房、2014年)、共編著に『経済・労働・格差 文学に見る』(冬至書房、2008年)、共著に『概説日本政治思想史』(ミネルヴァ書房、2009年)など。